

高橋みどり著「くいしいぼう」ちくま文庫、筑摩書房 2013年11月10日刊を読む

省三さんとカフェ

1. 両親の出身は群馬の前橋で、私も実はオギヤーと生まれたのは高崎です。ですから、親族のお墓参りとなると前橋へ出向きます。不謹慎ながらこのところ、私は少しさぼりがちですが、ね。
2. そうして前橋に行くたびに感じていたことは、町の老朽化。活気のない寂しい町へと進んでいること。駅前アーケードは、かつての面影はなく開店休業状態。もちろんシャッターの閉まったままの店も少なくない。子供のころ唯一その風情と味が好きだったお饅頭屋さんも、跡継ぎがいないということで、何年か前にいさぎよく店を閉めてしまった。老舗のその店がなくなると、もはや元気のある店は皆無に見えて、もの悲しい町となってしまった。東京からこんなに近いのに、あるいはこんなに近いから、中途半端になってしまったのだろうか。ちょっと足をのばせば東京だから、若者はそちらへ目も向き足も向くのだろう。とはいえ、小さいころから度々訪れるこの土地に愛着がないわけではないから、訪れるたびに胸が痛む。
3. 先日行った栃木的那須塩原の町も、そんな寂しいにおいのする町だった。かつては黒磯という名前で全国的に知れ渡り、那須の御用邸の玄関口であったその駅は、いまや新幹線的那須塩原駅に追われて、どこかうらさびしい。駅前のみやげもの屋は戸が閉まったまま。そこからのびる商店街も人影がパラパラ状態。一軒だけ湯気をたてて、温泉饅頭屋さんがなんとかがんばっている感じなのだ。
4. だのにこの町の一角に、ここだけは若者が集まる場所がある。「CAFE SHOZO」を中心としたその周辺。その中で一番始めにできたというこのカフェは、12時のオープン近くになると、どこからともなく車や人が集まってくる。かなり広い店内は、開店してほどなく満席となってしまう。うわさには聞いていたものの、なんだか昨今のいわゆるカフェには気が乗らない私だったが、ここはそうしたブームの前からあった古い店だということで、去年だったか北温泉の帰りに寄ってみたのだ。カフェ周辺には、同じ系列の家具の店や洋服と雑貨の店、台所まわりや布製品の店があり、どれもがんばっているのです。
5. 圧巻はやっぱり「CAFE SHOZO」でしょう。入り口の階では、コーヒー豆やホームメイドのケーキなどを販売していて、その横を通りすぎて階段を上る。足下に小さなカードがあって、そこには「大人はのんびり、子供は静かに。カフェは二階で営業しています」と、ありました。
6. 二階へ上がると、ほどよい採光と奥へ気持ちよくのびる部屋の大きさ、木の梁の具合や、ペツタリと塗られたペンキの感じが、昔の学校のような雰囲気懐かしく、けれども色合いや明るさが落

ち着いた大人っぽい雰囲気でもあり、40 過ぎの私たちのような大人でさえも気恥ずかしいということなく、とても居心地がいいのです。こうして、なんとか訪ねているうちに気づいたことがありました。

7. 座る席はなぜか引き寄せられるように、中央にある大きなテーブルの席。そこにはいつもきれいな水の入ったガラスの筒状の花瓶があり、花ではなくてさりげない枝ものが悠々といけてある。うるさい姑のようなんですが、この水がいつもきれいなことがまずは気持ちがいいのです。その向こうに見える景色は厨房で、中では若々しい男女のスタッフが、入れ替わり立ち替わりキビキビと働いているのが見える。窓際では粉を量ったり、ケーキを焼く準備を黙々としている人がいて、カウンター側ではいつもシュンシュンと大きなやかんで湯が沸いている。その脇にはペーパーフィルターが重ねられ、コーヒーはいつでも準備 OK。スタッフの誰もがコーヒーをいれられるのか、どうやらこうして観察していると、決まった人がそこに立っているわけではないようだ。確かにここではポーッと立っているスタッフがいらない。ありがちな、バイトの子がタラタラと時間かせぎしている様子もないし、無駄なおしゃべりをしている人もいない。みんな気持ち良さそうに働いているなあと思う。私はコーヒーはあまり得意ではないから紅茶を頼むのだけれど、いつもちゃんとおいしいから信頼できる、これがなにより素晴らしい。こんなに働いている人たちが気持ちがいいっていうのは、きっとみんなここで働いていることを誇らしく思っているからだろう。

8. そういえば、これと同じ気持ちの良さがかつて同じように感じたことがあったなと思い返してみると、それはサンフランシスコのパークレーにある「CHEZ PANISSE」というレストランでのことだった。田舎町パークレーの「CHEZ PANISSE」めざしてやってくるのは、私みたいな物好きな日本からのお客もいれば、おめかしして来る遠方のアメリカのお客や普段着で気軽に訪れる地元のお客もいる……そう、そこはいろんな食いしん坊の集まるオーガニックレストランなのです。西海岸ならではのおおらかさと季節感を存分に味わえる料理は、その店にいる時間さえも特別に幸福なものにしてくれるのだ。そして「CHEZ PANISSE」でも、働いている人たちの志が高いというのは清々しい、と思ったのだ。この「CAFE SHOZO」で働いている若者を見ていると、その時の印象が重なった。

9. こうした、ちゃんとした志を持った店はいつまでも存続し、ブームに流されることなく、むしろいい年の重ねかたをしていくに違いない。

10. さて、夏の早朝、車で上りきったところで「マウンテンカフェ」をやっているから来ませんか……と、省三さんからうれしいお誘いがあった。

11. 眠気なんて勝手なもので、そういう時にはバキッと目覚めるものだ。雲は眼下となり、すでに固いすすきの穂が美しく風にそよぎ、とんぼがたくさん飛んでいる。山はもうすっかり秋の気配だ。

12. お目当てのポンコツなジープにバイクをみつけた。「おはよう」、マウンテンカフェの準備は万端。すでに地面の上ではコールマンのストーブでお湯が沸いている。ベンチにはスコーンやフィナ

ンシェが行儀よく並んでいて、「自分のカップは持ってきて」という約束は忘れずに、私はそっと差し出す。アウトドアにこだわる男たちのカフェは、あくまでも持ち運びコンパクトなものばかりでカッコイイ。

13. まずは一杯、朝のコーヒーをいただく。「おいしい、こんなにおいしくコーヒーが飲めるなんて…」と感激のコーヒー苦手の私に、このコーヒー豆との出会いの話やら、省三さんの笑顔とともに楽しい話が続く。

14. そこにまた一台のジムニーが停まる。那須街道にある店のスタッフで、今朝方まで仕事をしていらしい。起きたての顔で、こうして駆けつけてくれる仲間がいて、その彼らを弟のように迎え入れる温かい省三さんがいる。自分の育った土地を愛し、家族を愛おしみ、いつも前向きに夢を描いていて、少年のような目をしている。

15. なぜ「CAFE SHOZO」に人が集まるのか……その答えは、この人そのものなのである。

16. 1988 CAFE SHOZO 栃木県那須塩原市高砂町 6-6 TEL 0287-63-9833

[コメント]

NASU 地区だけではなく、栃木県・福島県、日本国中からカフェの大好きな人々の集まる CAFE SHOZO。高橋みどりさんの素晴らしいエッセイで、なぜ CAFE SHOZO が愛され続けているのかがよくわかる。是非、御一読を。

— 2014年11月5日 林 明夫記 —